



あわ教育ネットワーク通信 第22号

編集・発行：鳴門教育大学 地域連携センター

発行日：2014年3月11日



この通信は、学校現場と鳴門教育大学との間の情報交流の活性化をめざしています。

第22号の内容：東日本大震災から3年、学校防災を考える

学校防災を考える

—学校安全ノートの作成を通して—

鳴門教育大学大学院 教授 阪根 健二

(鳴門教育大学地域連携センター)

「学校安全ノート」は、各学校で「防災教育」を実施するにあたって、教職員が活用できるように工夫されたものです。ここで重要な視点は、「これからの学校防災の担い手を育てる」ということです。ここでは、その意義と意味を説明しましょう。

(1) 防災教育の必要性

昨今の学校現場は、様々な問題を抱えており、教職員が日々対応に追われています。そうした中、学校では、防災をはじめ「学校安全」の取り組みを行っています。これは、児童生徒の安全を確保し、自らが危機回避に対応できる力が、喫緊で必須の内容であり、特に、阪神淡路大震災や東日本大震災の災禍によって、

「防災・減災」の必要性が認識されたことによります。また、徳島県は、南海トラフ巨大地震の影響を受ける可能性があるため、防災教育の取り組みは、特に重要な課題なのです。



(2) 防災教育のコンセプト

防災教育は、「想定外の災害に臨機応変に判断し、対応できる人」を育てることであり、これは学校教育に限ったことではありません。しかし、2011年の東日本大震災では、学校内で行われた防

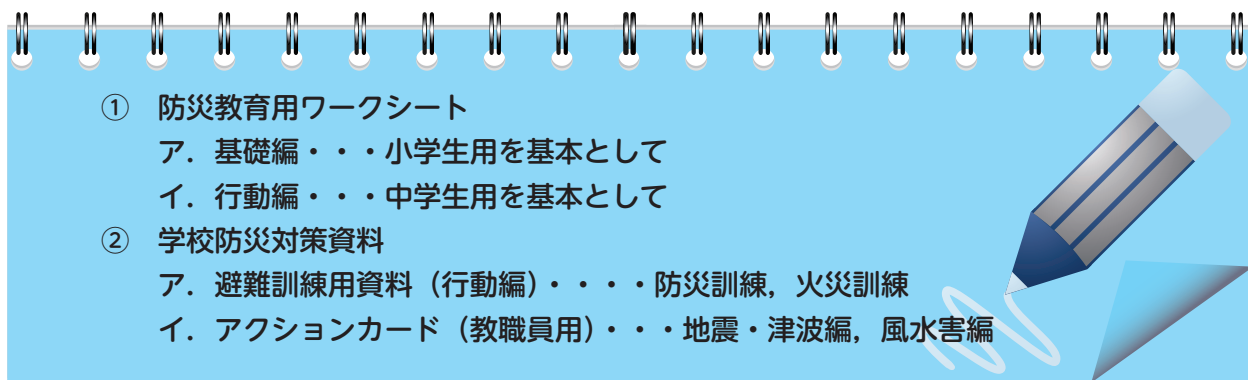
災教育や避難訓練の成果として、多くの子どもたちの命が助かった一方で、教師の対応のまずさから、授業中の子どもたちの命が失われたという事例もありました。これによって、教職員には、これまで以上に災害に対応できる力が必要になったものといえます。

文部科学省が設置した「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議」(2012)では、防災教育は、『災害発生時に、自ら危険を予測し、回避するための「主体的に行動する態度」を育成し、支援者となる視点から安全で安心な社会づくりに貢献する「共助・公助」の精神を育成する』としており、防災教育の多面性を示唆しています。

つまり、教師の災害時での判断力の向上だけでなく、児童生徒も「助かる人から助ける人へ」という「防災リーダー」の育成という点も視野に入れなくてはならないのです。

(3) 学校安全ノートの構成

こうした近年の情勢を勘案して、学校安全ノート（防災編）を作成しました。このノートは、以下の構成となっています。



特に、①は「朝の会・帰りの会を活用した短時間での防災教育」として、授業時間の確保が問われている昨今に、いかに短時間で教えることができるかという点を重視して、作成しました。ここでは、例示したワークシートをそのまま印刷し、帰りの会で配布して、家庭に持ち帰らせます。翌日の朝の会で、その内容を発表したり、情報交換したりするという形式ですので、特別な時間設定を考えていません。あくまでも、家庭での作業に基盤をおくわけです。

また、②は「今から出来る避難訓練の改善」という内容を中核としています。これまでの避難訓練は時間という軸だけを評価対象として行われてきました。そもそも避難訓練は、消防法の遵守から実施されている視点もあって、形式的になりやすいものです。この機会に「質の向上」と「評価の在り方」、そして「個々の教師の役割」などを明確にすべきと考えており、そこに焦点をあてて例示しています。ノートの中身を紹介しましょう。



じしん そな 地震に備えよう

◎下の絵はあるおうちのいつもの生活のようすを描いたものです。これからもし、大きな地震に襲われたら、どんな危険があると思いますか？

来る直前…



- ① 危ないと思うところに赤○をつけてみよう。
- ② なぜ危ないのか、書いてみよう。

※いくつか見つけることができたかな？おうちに帰ったら、自分の家の中にも危険なところがないか調べてみよう。

(出展 静岡大学防災総合センター イラスト たかやまみほ)

これは基礎編の中のワークシートの一例ですが、KYT（危機予知トレーニング）の技法を使い、絵から危機を想像させるものです。危険箇所を見つけるという予見能力を養うもので、これならば、小学生でも十分可能ですし、家庭と協力して、家の中で危険箇所を調べることにもつながります。

このように、絵などを活用することは重要です。また、ゲーム的なワークシートも本ノートに取り入れました。

確認しよう ～どう逃げる～

月 日

()年()組()番氏名()

① 金曜日のそうじの時間に「大津波警報」の校内放送が入った。

津波到達時間まで20分しかない。

どこへ逃げる？

どのルートを通る？



例 そうじ場所 () → () → () → () → 避難場所 ()

みんなが動き始めた。

学校にはどれくらいの人がいる？

1年生 () 人 + 2年生 () 人 + 3年生 () 人

+ 働いている人たち () 人 = 全員で () 人

◎逃げる時に大事なことはどんなことだろう？

保護者サイン

これは、中学生用ですが、「どう逃げる」、「どう逃げた」という視点で、自らの判断を求めるものです。被害想定は各校ごとに違います。また、放送機器の被害等で連絡できないこともあります。生徒の判断を促すことは重要であり、**通学路で、自宅から、自宅で、電気が使えないとき、水が使えないときなど、個々の状況での判断を重視**しています。

また、実際の訓練を通して、うまくいかなかったことや新しい発見から、実際の避難でのヒントを見つけることも重要です。各シートは家庭に持ち帰り、家族との話し合いを経てから学校での学習につないでいくのです。

なお、このノートは、本学客員研究員である元鳴門市北灘中学校長 益井英子氏、また、ゼミ生（教職大学院）である、小松島市小松島中学校教諭 古川和恵さん、佐賀県唐津市立入野小学校教諭 松竹寿郎さんが、ワークシート等の執筆者となり、教職大学院の実習課題として、現場で実践検証を行うものとして作成したものです。ここで掲載されている新聞記事は、本学と徳島新聞社との協定に基づいており、冊子内にある「防災すだちくん」は、徳島県危機管理部防災人材育成センターから許諾をいただき、本冊子に掲載しています。その他、防災関連センター等の資料も活用しました。

本冊子は関係機関以外に、鳴門市、小松島市、佐賀県唐津市の学校現場にも配布されますので、是非一読されますことを願っています。



徳島県南部「津波・地震対策」 現地視察に参加して

元鳴門市北灘中学校長 益井英子
(鳴門教育大学地域連携センター客員研究員)

1月25日(土)に、昨年に引き続き、徳島県の自主防災組織「命のきずな」ネットワーク推進事業の一環として、南部総合県民局・牟岐町西浦地区自主防災組織主催による防災交流会が行われました。県内自主防災組織リーダーの方々も集われ、鳴門教育大学の教官・学生とともに参加しました。町では、～南海トラフの巨大地震による大津波から、住民一人ひとりの命を助けるために～とのスローガンのもと、「避難路健康ウォーキング」と称し、3カ所の避難場所や避難路の確認とともに、



住民の毎日の健康づくりに活かす、こうした活動が随時行われているということです。

地区の代表の方の説明によりますと、この地域では、記録に残る西暦684年から、昭和21年の昭和南海地震まで、M8.0級以上の地震が8回発生しており、その都度、人々は町を再建してこられたとのこと。参加者は、総勢170名余りの交流会となり、

まず最初に、全員による顔合わせを行い、次に、県や町の関係者の方々によるあいさつや日程の説明がありました。その後、3コースに分かれ、実際に歩いて地域を巡り視察しました。

私は、6班の学生とともに「炊き出し班」として、防災備蓄食品を使った阿波尾鶏ご飯と豚汁料理を作り、配膳などを行いました。事前に、手際よく地元婦人会の方々が、ほとんど準備してくださっており、学生たちが手伝ったのはわずかの作業だけでした。おかげで時間に少し余裕があったので、婦人会のある方が、せっかくの機会なのでとお申し出くださり、近くの防潮堤に登りました。当日は暖かい日より恵まれ、海は穏やかであったにも関わらず、集落が海面よりも低いことに気づき、衝撃を受けました。これまでの災害時における、被害の甚大さを改めて思いました。海岸近くには、石碑が建てられており、あちらこちらの電信柱には過去の浸水時の目印なども記され、津波被害を後世に伝えようとする先人の方々の強い思いが伝わってきました。

内閣府の最新推計報告によりますと、この地域では、最大級で13.9メートルの津波が押し寄せ、牟岐漁港には、地震発生から、わずか3分で津波の第1波が到達すると言われています。地区には、ステージ面の高さ7.9メートルの「津波避難タワー」が設けられ、100名程が立てるスペースがありますが、「南海トラフ巨大地震」が発生した折には、万全とは言いきれないとの説明がありました。旧牟岐小学校の体育館に、地元警察の方や町民の方々も交えて、炊き出しによる昼食をいただきました。様々な方と席をともにし、会話を通して、各地域での取り組みやお互いの意見を交換しながらの、和やかな昼食会となりました。西部地域のリーダーの方々も臨席し、山間部特有の崖崩れや樹木の崩落などの被害は、瞬時に発生するので大変脅威だとのお話を伺いました。海に近い地域に住んでおり、念頭には、まず津波の被害を想定していたため、住む地域により様々な被害が発生するのだと改めて知りました。

交流・意見交換会では、地元の方々ならびに県下各地域の自主防災組織のリーダーの方々からの取り組み状況の報告や、課題などが出されました。支援を必要とする高齢者が増加傾向にある昨今、避難支援のあり方などの共通課題なども提示されました。地区では、夜間の災害も想定し、各家庭に充電式の懐中電灯を配布し、あちらこちらの避難路には、太陽光による明かりを設置しているとのお話も伺いました。



牟岐町での取り組み事例の紹介があり、西浦自主防災組織の会長さんや、牟岐町長さんのご発表をお聞きしました。漁港環境整備事業による瀬戸川水門の新設や、海部病院・牟岐小学校の高台への移転など、これまでも様々な取り組みがなされています。20メートル以上の高台には備蓄倉庫を設置し、町内会の経費で、備蓄の品目を準備し保管

しているとのことでした。12月上旬に、町一斉の避難訓練を実施し、1,000人を超える方が参加されるそうです。今後も継続して、様々な経路や諸条件下を考慮した、あらゆる訓練を実施したいとのご報告でした。

参加者からの質問があり、牟岐町での今後の取り組みや整備状況、さらには、人々の危機意識をいかに高めていくかという点などの問題点などが指摘され、今後の共通の課題として再認識されました。これほどの先進町においても、様々な不備などの指摘があり、この日参加者した各々は、自分たちの住む地域はまだまだ不十分であり、取り組まなければならないことが山積しているのだとの思いを強くされたと思います。



学生とともに、地元婦人会の方々による炊き出しをお手伝いしましたが、地域の方々の相互の心のつながりと、強い連帯意識の中で、地域一丸となった様々な取り組みがなされていました。一人ひとりが自分自身のこととして、常に危機意識を念頭に置き、さらに、それぞれの地域に応じた、より具体的な避難対策が、各地域においても、緊急に求められていると痛感いたしました。町民や子どもたちの参加が少なかったとの指摘もあり、地域あげでの非難訓練の重要性を思いました。

昨年同様、帰りに北島町の「防災センター」に立ち寄り、震度6弱の揺れを体験しました。わずか20秒程の時間ですが、ずいぶん長く感じました。固定していない家具などは、こちらに向かって吹っ飛んでくるほどの激しい揺れに、学生たちも恐怖を感じていました。東日本大震災では、この激しい揺れが5分間以上も続き、阪神大震災の実に、1,400倍の威力があったとの阪根教授の説明も伺い、想像を絶するほどの、大自然の破壊力の脅威を感じました。いうまでもなく、『減災』のためには、『自助』・『共助』の果たす役割が重要とされています。罹災する割合を、子どもの場合、1年間の時間に割り当ててみると、学校にいる割合は20パーセントくらいで、残り80パーセントは、家庭や地域にいる確率があるとの指摘があります。そのためにも、たとどこにしようとも、子どもたち自らが冷静に判断し、迅速に行動できるための日頃からの心構えと、学校並びに地域ぐるみの訓練が求められます。

今回、防災交流会に参加し、子どもたちへの「学校防災教育」を通して、子どものみならず大人や地域へも働きかけ、さらに防災への危機意識を高め広めていくことが大切だとの思いを改めて強くいたしました。学校現場等における、防災訓練などに生かしていただければ有り難いと考えております。

編集後記

昨年8月に実施されました鳴教大教育・文化フォーラムでは、多くの先生方のご参加をいただき、盛会のうちに終了しました。ご多忙の中、ご参会いただきました先生方には厚く御礼を申し上げます。

さて、今号は、東日本大震災から3年を経て、昨年引き続き、「防災教育」をテーマにしました。

東日本大震災では、個々の決断が生死を分けました。これはマニュアルどおりでは対応できないことの証明であり、大きな教訓として残されたのです。ここでは、主体的に行動することがいかに重要であるかを意味していますが、学校においては、子どもの命を預かっているだけに、教師が率先して判断することが求められます。そのため「学校安全ノート」を作成し、配布することになりました。今後、これを活用されることを願っております。

今年の防災実習も牟岐町で実施しましたが、学生たちは真剣な面持ちで取り組みました。防災は、鳴門市でも喫緊の課題です。そのためには、学校だけでなく、地域とともに考えていかなくてはなりません。本学では、「防災を考え、子どもの命を守る教員養成」に邁進しております。今号を是非、参考にさせていただければ幸いです。

次年度の予定

鳴教大教育・文化フォーラムは、平成26年8月8日(木)午前中に実施する予定です。テーマは、「家庭や保護者、地域との連携」について考える予定です。急激な教育改革の中、ゆとり教育から学力向上、土曜や長期休業中の活用、そして防災などの今日的な課題への対応など、これまでにない切り口で実施したいと考えております。

鳴門教育大学地域連携センター（教育連携コーディネート分野）
〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748
TEL・FAX 088-687-6593（担当 阪根健二）

再生紙を使用しています